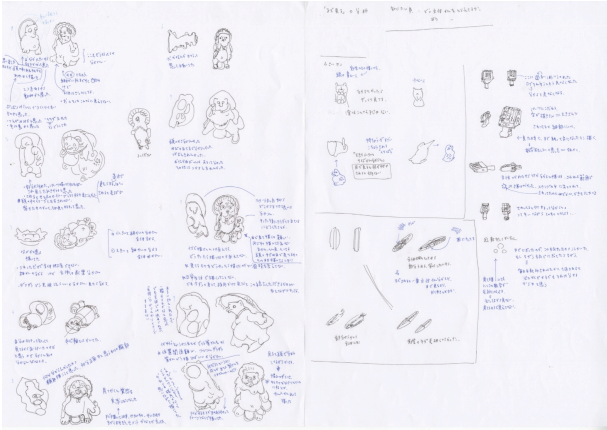
enoco[study?]滞在制作記録　　堀川すなお

時系列に、３ヶ月の滞在制作（2014 年 10 月～2015 年１月）で行ったことを記録する。

１）ワークショップ no.1　「手で見る」

- enoco 館内で実施（10 月～11 月）



思案：

　既に知っている対象を目で見て描くということは、描く際に既に知っているイメージが先行し、本当の意味で対象を見ずに描いているのではないかと考える。そのため目では見ずに手で触れて描くことで、対象を探りながら描くのではないかと考え、対象に対して持っている既存のイメージではない捉え方を見ることができるのではないかと考える。

上記の捉え方とは、対象の全体を把握する際に、一回の触る行為で得ることができる情報、それを全体に行った場合に、触れることで得た多くの情報を一つの対象として纏めるときにどのように纏めるのかという、距離の捉え方や全体の纏め方に新しい試みを見ることができるのではないかと考える。

行い：

①　中身が見えない箱の中に対象を入れ、利き手ではない方で対象を触り、利き手でその感触を描く。

②　箱の中から対象を取り出し、目で見て観察して描く。

③　手で触りながら描いたことと、目で見て描いたことの相違点や気付きを聞いて書き留める。

気付き：

　始めは箱の中に簡単な“棒”を入れた。すると、目で見ていないにもかかわらず、影を付け立体的に描いた人がいた。そして、手の中に収まるサイズの対象は、一目でそれがなにかと理解できるのと同様に、形の捉え方が容易にできたように思う。そしてこのワークショップ全体的には、対象の触れた感覚を描くというよりは、何かに似ているようだというイメージをあてはめて対象を描いていたように思う。そこから以下対象をいくつか試した。

“極端に小さい２cm ほどの動物の人形”を入れてみた。指で対象を理解するのが難しく、大まかな形と大まかな凹凸のみの描写となった。それは目で見る際に、小さいと見ることが難しいのと同様のことのように思う。

“回転印”を入れた。毎日事務の仕事で回転印を触られていた方が、対象を一握りしただけでそれが何か分かり、漢字で「回転印」と書いた人がいた。その後に絵で描いて下さいともう一度描いて頂いた。他の方でも同様だったが、始めに手で探り対象が何か分かったと気付いた時点で、そのものを触れているが、それをヒントに自分が今まで知っていた既存のイメージを重ね合わせて描いたように思う。そして、実際に目で見て観察して描く際にも同様に、ほとんどの人は対象をよく見ていないのだと分かった。それは回転印の数字の印が、実際は印なので鏡文字になっているが、描かれたものを見ると大抵はそのままの文字になっていたことで気付いた。

“30cm ほどの信楽焼のタヌキ”を入れた。手のひらに収まることができる対象は、一瞬で何か把握するのが容易なため、一触では把握できないが、しかし見ると何かすぐに理解できるものを対象に選んだ。最後の聞き取りで興味深かった意見は、対象が何か分からずに触れた感触をそのまま描いていたが、できた絵を見てタヌキだと分かったという意見や、信楽のタヌキと分かったが、詳細は分からないので、既に知っている信楽のタヌキを思い出しながら描いたとう意見、そして、陶器の鍋かと思い描いた人は実際の描かれたものを見るとタヌキになっていたという意見。その聞き取りの中で多くの気付きを得た。全文は記載しないが、聞き取りを纏めた内容の小タイトルのみを記載する。「全体から細部へ」「サイズ」「裏について」「細部からの構築」「特徴の記号化」「自分の位置からのスキャニング」「頭の中の形」「理解できないものは縁をとる」「目で見えることと手で見えること」「そのものを何とみるか」「位置の関係」「何を基準とするか」

最後に、触れて理解するということを通して気付いたことは、両手でものに触れると距離が分かる。これは両目で見たのと同じで、片手で触ると遠近がとれない、そして距離が分からないので、対象の断片を１つにまとめるのが難しい。

次への展開：

実際の行いから分かったことは、対象に手で触るとこれは何かと想像が働き、自分が知っている形に近づける人が多かった。そして対象を描く際に触れる手の向きで表、裏、手前、奥と対象の立体が把握できていたように思う。そのため今後の展開としては、何かに想像できる形でありながら全く違うという対象の選択方法や、手の動きが視覚に入らない場合はどのようになるかなど試みる。

２）ワークショップ no.2 「他人のものの捉え方を聞き取る」

- 木津川市旧漁業組合で実施（11 月 2 日-15 日）

思案：

　様々な年代層や職業の背景が異なる沢山の方々と出会える機会があるアートプロジェクトで、沢山の方々と話をしてその方の目線を伺う。そして自分の制作に新たな目線を取り込もうと試みる。

行い：

木津川アート 2014 で、今は廃屋となった旧漁業組合の建物を展示場所に行った。内容は、そこで見つけた漁業に用いられていた一本の“浮子”をモチーフに、私が一人で様々な角度や距離から観察し 112 枚のドローイングを描いた。そして浮子を見つけた場所で展示をし、見に来られた方に、あなたのものの捉え方とは？を伺って書き留めた。17 ページの一冊の冊子を作った。

気付き：

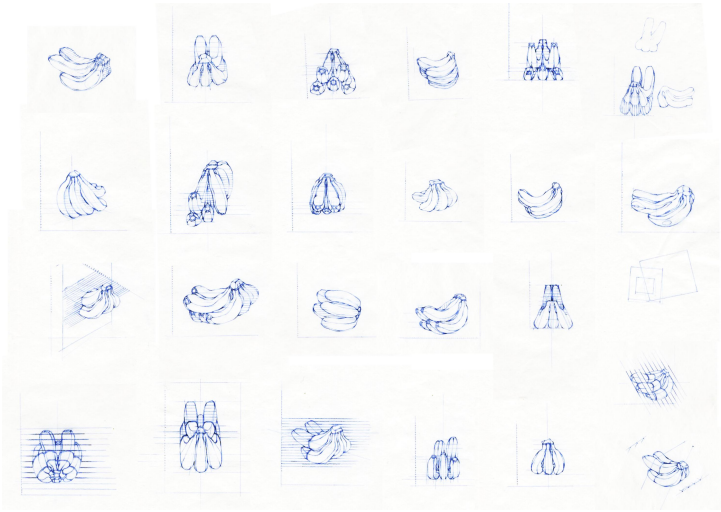
　話をしていると、今まで気付かなかったことや、自分が当たり前であったと疑いもしなかったことを新たに気付く話を沢山聞くことができた。全文は記載できないので、話した内容の小タイトルのみ記入する。

「マクロとミクロ」「断片視覚のコラージュ」「情報の修正」「凸凹の言語化」「３D プリンター」「記号・共有・そのもの」「見る位置の逆転」「平均的な見方と自分の見方」「どの手がかりの抽出でそのものと分かるか」「共有するための見方と自分の見方」「抽象とそのものの違い」「図：色々な視点から」「見たものから理解へ」「他人を解釈」

次への展開：

　上記の小タイトルから今回は、「凸凹の言語化」と「マクロとミクロ」「断片視覚のコラージュ」「どの手がかりの抽出でそのものと分かるか」を考えてみた。

3）「影・立体について考える」



思案：

今まで対象を捉える際に、輪郭線を描いていた。その理由として、あるものがそれと分かるのは他と区別をしているからで、他との違いを表すのに対象と他の境界線を描いていて対象を捉えていた。そのため影の必要性を感じず描いていなかった。今回の滞在制作中に行った木津川アートでの制作では、一つの浮子をどのように捉えることができるのかを試みた結果に、影を捉えるということも行った。そこからの発展で、今まで輪郭線のように線を用いて対象を捉えていたということに、影のグラデーションも線に変換できないか考える。これは視覚で捉えた曖昧な色の印象を、描く前に自分なりに理解したいと思ったからである。

行い：

輪郭線はそのものの確固とした形であると考えるが、影は光の加減で変化するものなのでまず描く必要性について考えた。影は対象がどのような形をしているのかを捉える手助けをする。全体の距離や立体感、凹凸を表すために用いる。今回の行いでは、全体の立体感や距離を理解するための行いにしぼった。

実際の行いは、対処を輪切りにするようにレイヤーをもうけ、レイヤーより奥に印をするということを行った。

気付き：

まだ途中のためによく分かっていない。

次への展開：

まだ思考中。

4）「部分で対象を見る」

思案：

対象を理解する際に、まづ対象の全体を捉える時には全体を漠然と見ているようで、対象の一部に目がいき全体を把握しようとする。または気になった部分を注視して全体の構造を理解する手助けをする。そう考えた際に、全体を理解しようとすると、まづ部分を理解する見方を考える。

行い：

紙に 1 cm 四方、2cm 四方、3cm 四方の穴をそれぞれ開けて、その穴を対象にあて対象の部分のみを描く。

どの部分を理解すれば全体が把握できるのか、幾つの部分を捉えると全体が理解できるのかを考える。

気付き：

今回の対象はバナナで行ったが、1cm 四方の穴からの情報では情報量が少なく、その部分を幾つか集めても対象が何かと理解するのが難しかった。 3 cm 四方だと情報量がありすぎて、3cm 四方の中の情報をどこまで捉えるかが問題になった。

次への展開：

まだ思考中。

5）ワークショップ no3　「言葉で対象を見る」(行いⅠ~)

思案：

他人の目線に立って対象を捉える際に、私たちが普段用いている言葉を使い相手の捉え方を理解しようと試みる。

行いⅠ：「ペットボトル」

① 私は A と B に言葉でものの形を説明する。説明した言葉は書き留める。ものは何か伝えない。

② A と B は私の説明を聞き、それを随時形に描く。

③ その後、私が自分の書き留めた言葉を読み、その通りに描く。ものは見ない。

④ もう一度、私がものを見ながら自分の書き留めた言葉を読み、その通りに描く。

気付き：

自分では対象の形を言葉を用いて上手く伝えることができていたと思っていたが、実際にワークショップの後にできた A と B の絵を見ると、全く伝えきれていなかったのだと分かった。しかし実際に自分の書いた言葉を読み描くと、自分が想像している対象の形の通りになった。

ここから自分の制作の柱としている、今まで知っていると思い込んでいたものは一体何だったのか？と、目の前にあるもの その本来の姿を探るため、制作をしている。ということを考えて行くための 1 つの過程を得たように思った。

「ペットボトル」以外にも、他人 A と B が同じように自分に、私が何か分からない対象を言葉で説明した際に、自分はどのような捉え方をするのかを試す。A 又は B がモチーフを選び、上記手順と同じ方法で私が描く。モチーフとなったものは、行いⅡ「孫の手」、行いⅢ「自動掃除機」、行いⅣ「時計」、行いⅤ「ハンガー」。

そこで興味深かったのは、行いⅥ「砂時計」をモチーフに私が A と B に言葉で説明し、描かれた絵を見、A と B に行いについて聞き取りを行った際に気付いたことで、A は始めから立体的に言われた言葉をくみ立てていた。そして B は平面的に言葉をくみ立てていた。ここでの立体的と平面的の違いは、例えば、立方体と正方形の違いのようなもの。私はやはり色々な角度や距離で対象を見て説明していたので、立体的な見方になっていた。描く方が同じ見方（立体的な見方）になると、説明の理解が上手くできたが、見方が違う（平面的な見方）と理解が上手くできなかった。

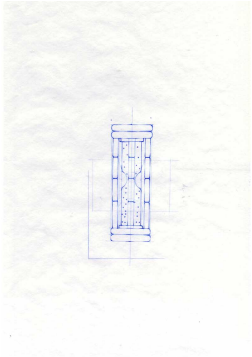
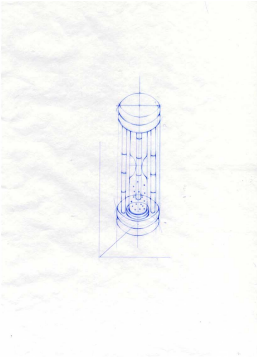
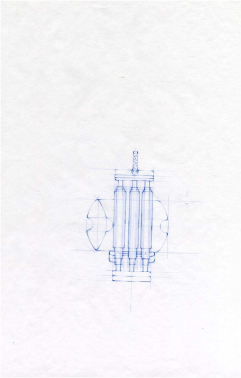
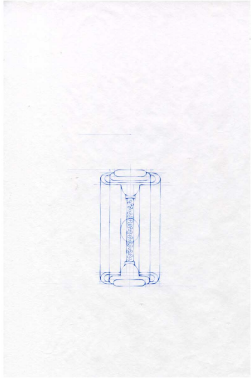
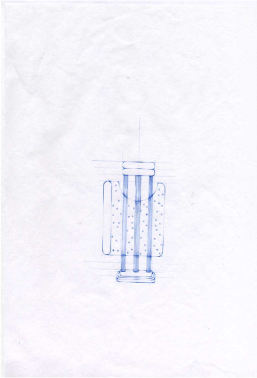
もう 1 つは、行いⅦ「鞄」をモチーフに A が私と B に鞄の形について説明した際に、始めに「これは鞄です」という説明から入った。今までは、対象が何か分からない状態で説明を聞き描いていたが、今回は対象が何か理解した状態で描いた。そこで分かったことは、始めに何についての説明なのか分かっていると、自分の頭にある「鞄」に近づけて描いたということである。説明を聞いているようで、聞いていなかったのではないかと思う。

次への展開：

　対象が何かと分かった状態で描くことと、分からない状態で描くこと、そこにはどのようなイメージのくみ立て方の違いがあるのか。

そして、自分の言葉で描くことと、他人の言葉で描くこと、そこにどのような受け取り方の違いがあるのか。を考える。

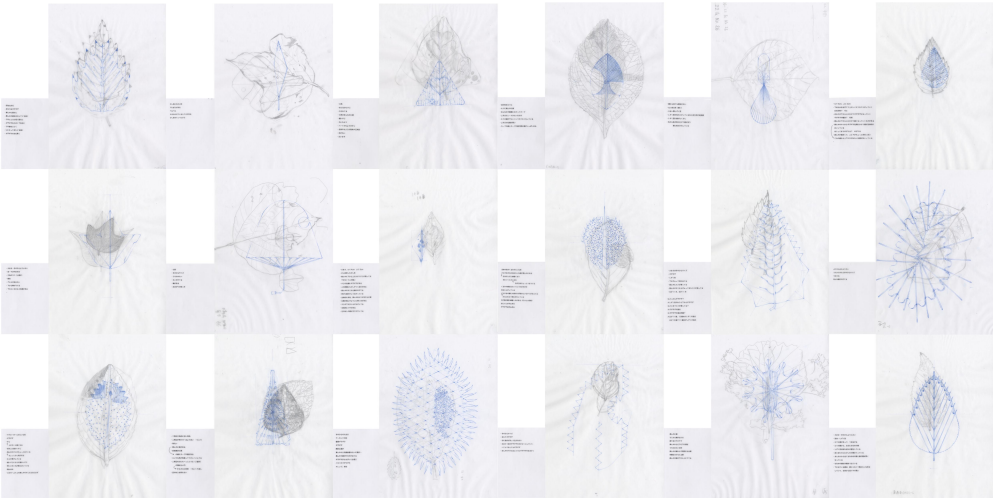
実際、「ホッチキス」「洗濯バサミ」で発展した。

６）ワークショップ no.4　「言葉で対象を見る」ー行いⅧ「葉っぱ」

–大阪府立みどり清朋高等学校 美術選択 2,3 年生

受講者は二人一組になる(受講者 A. B)。私が全員に、ひとりひとりそれぞれちがう形の葉っぱを渡す。



① A は自分の持っている葉っぱを B に見せずに、言葉だけでその形を説明する。説明した言葉は書き留める。

② B は A の説明を聞き、それを随時形に描く。

③ A は B にモチーフとなった葉っぱを見せ、次に B は目で見てそれを描く。

④ 私が A の書き留めた言葉を読んで随時描く。

⑤ １枚の葉っぱからどのような捉え方ができたのか、描かれた 3 枚を重ねる。

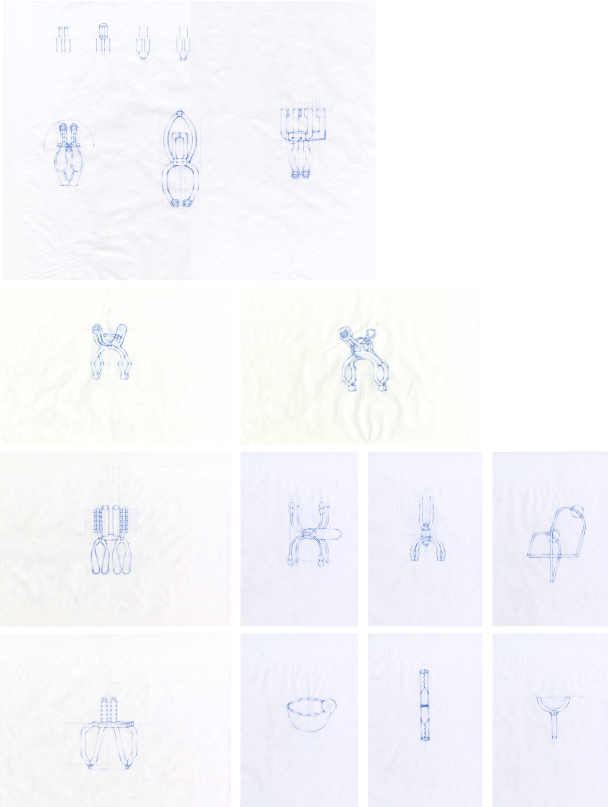
気付き：

一人一人違う形の葉っぱを渡した。実際に描くと、それぞれ自分の形の葉っぱに近づいているように思った。興味深かったのは、ワークショップ後に書いてもらったアンケートに記載されていた言葉で、全体像を捉えることができなかったため描くのが難しかった。しかし、見て描くとイメージで全体像を捉えてしまっている。や、見た目が簡単だったのであえて別のものに例えて形を言った。色々と想像しながらだったので形がまとまらなかったなど。

次への展開：

今後の発展として、今回は描いている途中でほとんどの人が対象は何かということに気付いた。言葉で受け取る側は元々頭の中に記憶している対象のイメージをヒントに描いている行為なので、葉っぱと分かった時点で「葉っぱ」という同じ言葉からそれぞれ持ってるイメージの違いが出やすかったのではないかと思う。そのことをより浮き彫りにできる行いを次の展開で考え実行する。

7）「言葉で対象を見る」―行いⅨ「洗濯バサミ」



①　私は A にものの名前を始めに伝える。次にその形について言葉で説明する。説明した言葉は書き留める。

②　A は説明を聞き、それを随時形に描く。

③　私が説明した言葉を私が読んで随時描く。

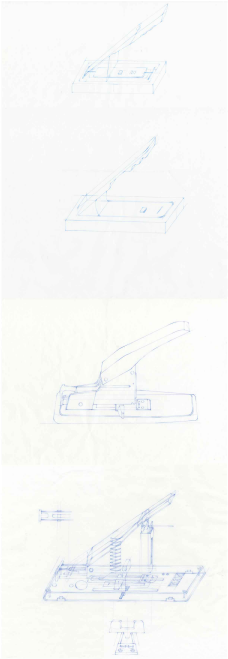
気付き：

　両親に向けて行った。始めに「今から説明するのは洗濯バサミです。いつも家で使っているものです。」という説明から行った。ワークショップ後の聞き取りによると、始めの段階では、3 人の頭の中には同じ洗濯バサミが想像できていた。しかし固有の洗濯バサミに関して言っていると分かっているのだが、説明を自分の思っている記憶の対象に重ね合わせていくと、説明を聞くということが中途半端になり、説明から素直に形を描くことが難しくなった。

次への展開：

対象が何か分からない状態と何か知っていながら描く状態とではどのような違いがあるのか、「ホッチキス」で試みる。

８）「言葉で対象を見る」ー行いＸ「ホッチキス」



①　Ａ は私に言葉でものの形を説明する。説明した言葉は書き留める。ものは何か伝えない。

②　私は Ａ の説明を聞き、それを随時形に描く。

①‘　Ａ は私にものの名前を伝える。その後、私は①の行いで Ａ が説明した言葉を再び読み描く。ものは見ない。

①’’ ①で用いたものを私が目で見て描く。

①’’’ ①で用いたものを、今度は私が自分で目で見て言葉で形の説明を書き留める。

②’’’ 私は自分が説明した言葉を読みながら形を描く。ものは見ない。

気付き：

①と①‘の違いは、対象が何か分からずに描くと、説明の形をくみ立てているように思う。対象が何か分かりながら描くと、知っている対象の想像に説明を部品の組み立てのようにあてはめて行くように感じた。

①’’では①と①’と同じ方向から目で見て描いたが、見えているのを全て描いたように思っていた。しかし①’’’を描いた後に、全く見ていなかったのだと気付いた。①’’’では自分で観察し言葉で書き留めたのだが、通し図のような表れになった。それはさまざまな角度からの目線で観察した形を１つにくみ立てた結果そのようになった。①’’では一方向からの視点だけで描いていたが、①’’’のように観察に言葉を用いると、色々な方向からの視点を１つに纏めることが凄く容易にできた。

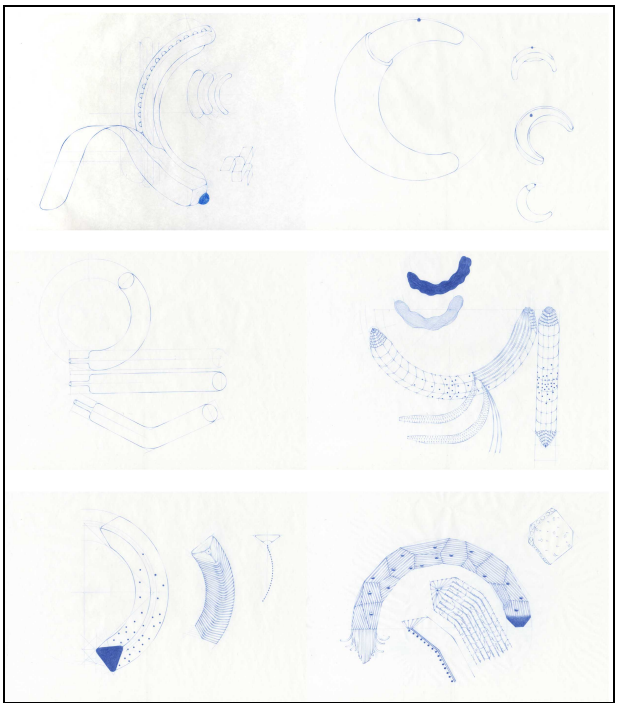
次の展開：

①’’’での行いにより、一人でもワークショップと同じ効果が得られるのではないかと思い「バナナ大」で試す。

思案：

既に知っている記憶の形と観察後の形の違いにどのような差があるのかを考える。

９）「言葉で対象を見る」―行いXI　「バナナ３」



①　アメリカ人、ドイツ人、日本人の友人がバナナについて覚えている形を文章で書く。

②　私はその文章を読み、それを随時形にする。

③　同じ友人がバナナを実際に観察し、観察した形を言葉で書き留める。

④　私はその文章を読み、それを随時形にする。

気付き：

３カ国の人に行ってもらったが、違いを見るには国によってのちがいよりも、個人の違いの方が大きいのではと思った。

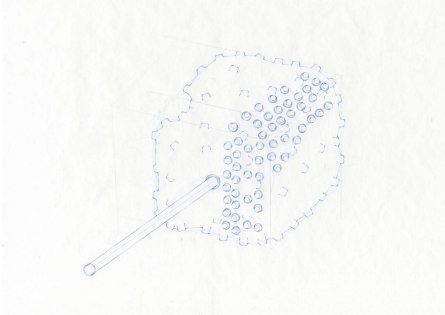
次の展開：

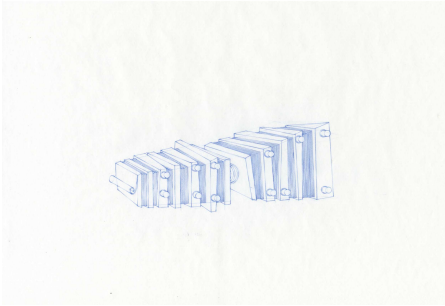
もう少し多くの人の行いを見て、より深く考えたい。そして対象をより柔軟に考えたい。

思案：

　バナナ３を行った際に、違う言語で書かれた文章を自分がどのように捉えているのか、他言語の方と話をする中で、理解の相違がおこっているはずだけど、なんとなく分かったような気になっている。これは日本語同士でもおなじだが、このことを過程にいれて行ってみた。

１０）「言葉で対象を見る」一行いⅫ「カメラ」





①　A は私に英語でものの形の説明をする。説明した言葉は書き留める。ものの名前は聞かない。

②　私は A の説明を聞き、それを随時形に描く。

①’　A が説明した言葉をパソコンの一発変換機能で日本語に訳す。

②‘　私はその文を読み、それを随時形に描く。

気付き：

　一つの単語をどのように捉えるか、①では文脈の中から読み解こうとしたが、①‘では違う読み取り方がされていた。言葉をどのように捉えるか、日本語でも同じではないかと思った。

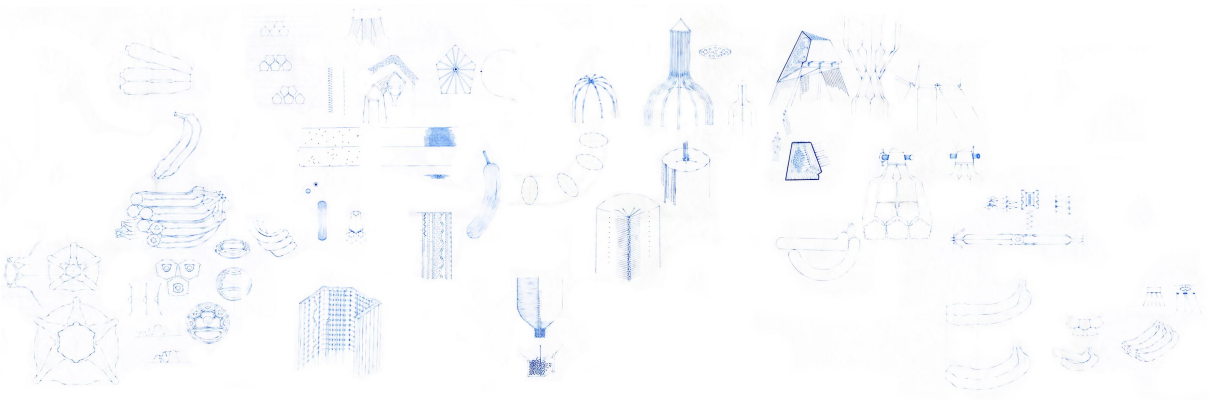
次の発展：

言語の違いによる捉え方の曖昧さをより探れるのでないかと考える。

思案：

　ホッチキスからの展開で、一人で対象を観察し書いた言葉から描くということを行う。去年に行った「バナナ旧」では、もうバナナを観察し尽くしたように思ったが、ホッチキスからの展開で、言葉を挟むことでどのような発見ができるか試す。

１１）「言葉で対象を見る」一行いＸⅢ「バナナ大」



①　私が自分でものを見、その形を言葉で説明する。説明した言葉は書き留める。

②　私は自分が説明した言葉を読みながら形を描く。ものは見ない。

気付き：

　言葉を用いて観察すると、観察したことを絵で表すよりは、目の動きと言葉を書く早さが近いと感じ、目で見たことがそのまま表せた。

次の展開：

　言葉を聞き随時形にしたので、できた絵を見ると、一つ一つのドローイングがなぜこの大きさだったのか、文節の分かれにそってドローイングも分けたが、一つのモチーフを見ているのになぜこの配置になったのか、など今後同じ文章でもう以上のことを考え再度描く。